■研究十二月往来〈160〉

「守屋」と「国栖」のうつほ隠れ

岩崎雅彦

「国栖」は大永四年(一五二四)奥書の『能本作者註文』に曲名が見え、金春禅鳳の『反古裏の書』や、大永(一五二一～二八)頃の下掛りの装束付『舞芸六輪次第』にも同曲に関する記事がある。「国栖」は遅くとも十六世紀の初頭には成立していたと考えられる(作者不詳)。この曲では大友皇子に追われて吉野に逃れて来た浄見原の天皇、すなわち天武天皇(子方)を漁師の老夫婦(前シテ・前ツレ)が、伏せた船の中に隠してその危機を救う。

『宇治拾遺物語』一八六「清見原天皇と大友皇子と合戦の事」では、天皇は墨俣の渡りで、不破の明神の化身の女によって湯舟を伏せた中に隠され、『源平盛衰記』巻十四「三井寺僉議附浄見原天皇の事」では、鈴鹿山で老夫婦によって岩屋にかくまわれる。「国栖」がこれらを脚色したものであることは、『謡曲大観』以下、先学の指摘する所である。

廃曲「守屋」は『申楽談儀』に井阿弥が演じたことが記される古曲である。この曲の進行については、堂本正樹氏の「番外曲水脈」(『能楽タイムズ』昭和59・11、12。同60・1)に詳しく紹介されているので、ここでは当面問題とする前場の展開を簡単に記すことにする。初めに椋の木の作り物が出される。この中には物部守屋に追われた聖徳太子(子方)が隠れている。ついで守屋方の追手(アイ)が「やるまいぞ、ノ〳〵」と出、太子を追うが、木のそばで見失う。守屋(ワキ)が登場、「やあ〳〵太子を討ちとめ申したるか」と問い、アイは見失ったことを報告する。守屋は杣人(前シテ)を呼び出し、木を切り倒すように命じるが、杣人は春日明神の言葉を引くなどして脅し、軍兵を退散させる。杣人が太子に出て来るように促すと、木が二つに割れて太子が姿を現す。

さてこそ太子のおん命、いきの松原今までの、こゝろづくしもいたはしや、はや〳〵おん出で候へと、ほと〳〵とうつほ木の、箱をあけたるごとくにて、ふたつに割るれば忝なや、太子は恙ましまさず、

「国栖」は多くの点でこの「守屋」の前場に似ている。皇子役の子方が敵に追われて作り物の中に隠れること、アイの追手がそれを追って来ること、神仏(春日明神、蔵王権現)の化身と考えられる前シテの老翁が追手を追い返すこと等、曲の展開上主要な要素のほとんどが両曲で共通する。「国栖」が「守屋」を参考にして作られたことは間違いなかろう。

聖徳太子が椋の木に隠れた話は、中世の太子伝の語るところだが(阿部泰郎氏「中世芸能と太子伝」『観世』昭和56・2)、この話は『源平盛衰記』巻二十一「聖徳太子椋の木附天武天皇榎木の事」にも見える。

昔聖徳太子の仏法を興さんとて、守屋と合戦し給ひしに、逆軍は大勢なり、太子は無勢なりければ、如何も叶ひがたし。大返といふ所にて、只一人控へ給ひけるに、守屋の臣と勝溝の連と行き会って、遁れがたくおはしけるに、道に大きなる椋の木あり。二つにわれて太子と馬とを木の空に隠し奉り、その木すなはち癒え合ひて、太子を助け奉り、終に守屋を亡ぼして、仏法を興し給ひけり。

『盛衰記』はこれに続けて、天武天皇が大友皇子に追われて榎木に隠れたことを記している。この二つの話は頼朝の石橋山伏木隠れの先例として引かれ、勝利へのめでたき前兆として位置づけられている。天武天皇の榎木隠

れは同書巻十四にも記される。鈴鹿山で老夫婦にかくまわれた天皇は美濃国に出る。

大友皇子、聞き給ひて、勢を催して美濃国へ向ひけり。何れの所にかありけん、宮を見つけ奉りて追ひ懸けたり。危かりける時、野中に大きなる榎木一本あり。二つに破れて中開けたり。宮その中に入り給へば木又癒え合ひぬ。敵、打廻り見けれども、見え給はざりければ陣に帰りぬ。その後、榎木又破れて中より出で給ひぬ。

木の〈うつほ〉に聖なるものが宿るとする考え方は、文学作品にも多く見られる。森正人氏は仲忠母子が杉のうつほに暮らす『宇津保物語』や、円仁が杉のうつほに籠って法華経を書写する『今昔物語集』巻十一・二十七「慈覚大師始メテ楞厳院ヲ建テタル語」、瘤のある翁がうつほ木に雨宿りをして鬼の宴会に遭遇する『宇治拾遺物語』三「鬼に瘻とらるゝ事」、そして『浦島明神縁起』の浦島が松のうつほで玉手箱を開けて白髪の老人になる場面などを挙げ、うつほは異界ないし異界への通路であり、変身の装置であり、また神仏の鎮座する空間であったとしている（「〈物語の場〉と物語のかたち」『中世文学』38号。平成5・6）。

「西行桜」では老木の桜のうつほから老体の桜の精が現れる。

不思議やな、朽ちたる花のうつほ木より、白髪の老人現れて、西行が歌を詠ずるありさま、さも不思議なる人体なり。

淡路島の千光寺の縁起は、次のような話である。猟師が猪に矢を射、これを追って行くと、山中の大杉の洞に千手観音の像があり、その胸に矢が刺さっていた。猟師はこれを見て出家し、寺を建てて千光寺とした。同寺の参詣曼荼羅には画面の左上の杉のうつほの中に千手観音の姿が描かれている。

うつほ木は身を隠すための単なる物理的な空間ではなく、そこに籠り再び出て来ることによって生まれ変わり、聖なる力を付与される場であると認識されていた。『盛衰記』の記述は、うつほ隠れの行動が、守屋や大友皇子を滅ぼす結果を生んだという理解であり、「守屋」も

太子この木におん向かひありて、三度礼したまひて、我を孕める木なれば、平産木と名づくべし。これぞまことのはは

の、守屋が攻めを助けたりや。

とあって、同様の理解である。「国栖」の場合も、天皇は船にいったん隠れ、再び姿を現すという過程を経ることによって、蔵王権現の祝福を受けることができるのであろう。

（法政大学能楽研究所所員）